

科目名・単位数	ファイナンス論 2単位	科目分類	経済・経営系	発展科目
配当年次	1年次・秋学期・昼	担当教員	すずき まこと	鈴木 誠
履修形態	選択			
授業概要	<p>経済は実物経済と金融経済に区分することができるが、ファイナンスは金融経済を支える重要な柱のひとつであり、会計と密接に関係のある学問領域である。本講義では、いわゆる狭義のファイナンスとされる現代ファイナンス論だけでなく、広義のファイナンスとして位置付けられる金融論や銀行論も含めたテーマを扱い、履修者とともに理論を学び、金融現象を解明し、金融諸制度の目的やその内容を考察したいと考えている。</p>			
到達目標	<p>日々の経済活動に見られる金融現象を理論的に説明できたり、その仕組みや制度について解説することができるようになること。</p>			
授業方法	<p>基本的に講義形式をとるが、金融現象について日々考えることも重要であることから、必ず履修者に質問を投げかけ、双方向の授業形式も適宜実施したいと考えている。</p>			
事前・事後学習	<p>事前学習としては、次回の授業の対象とされる教科書を一読し、新出の用語等を調べておくこと。(60分程度) 事後学習としては、授業のおさらいとして、学習した個所を帰宅後、再読しておくこと。(60分程度)</p>			
成績評価の方法	<p>評価方法は次の通りとする。レポート提出(1回)[30%]、期末テスト(1回)[70%]とする。</p>			
フィードバックの方法	<p>試験の解答の解説、レポートの解説はそれぞれ終了後に行うものとする。</p>			
履修上の注意	<p>ファイナンスの入り口は身近にある。履修者は是非、日々の新聞(特に日本経済新聞)に目を通して、ファイナンスと社会のつながりを知って欲しい。</p>			
授 業 計 画				
第1回	<p>イントロダクション ファイナンスとは 本講義で扱う内容について解説する。さらに、ファイナンスとはどのようにして、いつごろ発生し、人類の生活にどのような影響を与えることとなったか、ビデオを見て理解を図る。歴史を動かす要因の一つとしてファイナンスが関わっ</p>			
第2回	<p>経済における金融の意義 日常的に利用され、当たり前と思われる貨幣、そして金融が経済においてどのような意義を持っているか、歴史的な貨幣経済の発展から現在に至るまでを考察する。貨幣の誕生にはじまり、複雑な金融商品の登場はわれわれの生活をどのように関与して</p>			
第3回	<p>金融商品と金融取引市場 広く金融取引の市場は短期的取引を行う狭義の金融市場と長期的取引を行う資本市場に区分され、各々の市場において取引される金融商品や取引業者、投資家は異なる。本授業ではファイナンスの基礎となる金融商品に関する基礎的知識を養うことを目</p>			

第4回	株式発行市場 株式会社は設立の段階で株式を発行することから始まる。ただし、今回のテーマとなる株式発行市場は証券市場における機能の一部であり、新規上場以降、様々な形で企業は発行市場から資金を調達することとなる。ここでは、公開価格の決定、増資の特徴と形態などについて論じる。
第5回	株式流通市場 日々の経済活動の目安となる株価水準を形成する市場が株式流通市場である。ここでは、流通市場のける代表的な取引形態を学ぶとともに、わが国の上場制度、売買制度、決済システムについて理解を深める。さらに、代表的な株価指数の計算方法とその特徴について学ぶ。
第6回	債券発行市場と流通市場 債券の発行方法も株式同様様々の種類がある。ここではこうした発行方法を学び、同時に流通市場における取引の仕組みについても学習する。また、実際の債券の取引受渡では、金利を含めた計算、基準価格への変換などの手続きが必要となる。実際の計算を通して学習する。
第7回	債券格付け 債券格付けは米国で誕生したが、今や債券投資に不可欠な情報の一つとなっている。ここでは、格付け機関の経済的な意義を学ぶと同時に、格付けビジネスの問題点についても考えたい。2000年に倒産した米国企業エンロンや2008年の米国金融危機における格付け機関の功罪についても考察したい。
第8回	派生証券と証券化商品 株式や債券以外の証券あるいは証券化資産についてここで学習する。本源証券の派生証券である、先物や先渡し、権利の売買であるオプションや権利の交換であるスワップの特徴を学び、併せてMBSやCDOといった不動産担保証券や債務担保証券についても理解を図る。
第9回	機関投資家とコーポレートガバナンス これまで学んできた証券に投資する主体についてここで学習する。特に、機関投資家と呼ばれる投手主体の投資スタイルや種別を学び、彼らの直面する問題の解決手段としてのコーポレートガバナンス活動について理解を深める。
第10回	確実性下と不確実性下の証券価格決定理論①（ポートフォリオ組成） ここでは、確実性下の価格決定理論として、割引モデル（DDM）について解説する。続いて、不確実性下の価格決定理論として、期待値と分散による危険資産の性格付けにより、ポートフォリオの組成のメリットを理解する。
第11回	不確実性下の証券価格決定理論②（効率的ポートフォリオ集合） 前回の講義に基づき、危険資産で組成されるポートフォリオ集合を作成する。実効可能なポートフォリオ集合において、合理的投資家の選択する集合から効率的フロンティアを導く。
第12回	不確実性下の証券価格決定理論③（CAPMモデル） 前回、前々回の講義を基礎として、シャープが辿り着いたCAPMモデルを解説する。計算による理解と図による理解の2方向から学習し、CAPMモデルの簡易さ、利便性を知るとともに、現実に適合する上での問題点について考察する。
第13回	企業価値の計測 前回授業で学んだCAPMは投資モデルとして利用するだけでなく、コーポレートファイナンスにおいて重要な役割を果たす。すなわち、資本調達における資本コストの推計である。本授業ではCAPMを利用して、調達コストを具体的に計測し、その値についての適切性を議論する。
第14回	オプション価格の決定理論①（1期間モデル） デリバティブで学んだオプション価格を求める方法を学習する。一般にブラック・ショールズ方程式を利用する 경우가多いが、より広範囲に適用可能とされる基礎的な2項モデルに基づくオプション価格の計算を行う。
第15回	オプション価格の決定理論②（多期間モデル） 前回の講義では1期間のオプションモデルであったが、多期間に拡張した場合どのような計算によって求めることができるだろうか。本授業では、1期間から2期間に拡張した場合のオプション価格を計算により求める演習を行う。
テキスト	大村敬一ほか著「証券論」有斐閣、ISBN: 978-4-461-16427-7、4000円＋税
参考図書	適宜授業中に指示する。